

ひめまつ

54

宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

ひめまつ 目次 (第五十四号)

表紙……海老原由紀子 題字……石川木魚 写真……写真部・編集部

随想

心優しい人材育てたい
―献身的な姿に感動、人間そのものを知る― ……校長 須賀 淳…1

❖女子教育の先駆者 須賀栄子先生を偲ぶ ……5

❖新旧生徒会長のあいさつ ……9

創立百周年行事に協力 (生徒会会長に就任して) ……熊谷 憲一…10

国境越えたつながり (任期を終えて思うこと) ……丹羽 悦子…11

〈声〉 ごみゴミ護美を考える ……12

心の変革は社会の変革
私のできることで
やる気が 大切
三年 唐木 成人
三年 柏崎 まゆみ
三年 川島 美香
二年 羽石 香織

それは心がけ次第 一年 酒井 しおり

*心に強く響くもの (校内読書感想文入賞作品) ……15

一位 「小石川の家」 三年 赤木 晴美 三位 「いちご同盟」 二年 小林 純佳
二位 「沈黙の春」 三年 久米 千広 一位 「逆境の心理学」 一年 白井 紀子
三位 「風立ちぬ」 三年 長谷川恭子 二位 「日本人の秘密」 一年 福田 良奈
一位 「人間失格」 二年 福田 夢美 三位 「車輪の下」 一年 黒澤 優
二位 「人間失格」 二年 田村 徹郎

作品集 ……30

詩 「三年」 保知戸由布・篠原 瑞季・山田 智美 「二年」 岡田志保子 「二年」 柿沼友加利

短歌 「三年」 酒出 康裕

俳句 「三年」 白井 早苗・若林久仁子・白井 和枝・渡辺 悠喜・熊倉 章絵

あとらんだむ ……33

「わたしは、いま」心と音楽 三年 土橋 まどか
人間は技術革新に追いつけるか 二年 萩原 歩
音楽について 一年 尾原 深水

関西・四国・大笹・那須の旅

〔三年〕

平和の創造
印象的だった室生寺
疑似体験の連続
それは最高の旅行だった

伊澤 朱美

下里 喬史

高山 温子

堀江 美枝

〔二年〕

緑豊かな大笹牧場で

坂本 真弓

〔一年〕

りんどう湖に遊ぶ

大垣 晃輝

招待席

山百合の花の咲くころ
創立百周年を迎う

教諭 金田 和久

敏彰

現代を生きる

教諭 吉田 享一

◎特別リポート

中国シルクロード石窟院
アメリカに留学して

講師 小材 忠之
卒業生 浅場 葉月

▼わがホームルームの紹介

三年・二年・一年

◆委員会・クラブ報告

編集委員会・美化委員会・風紀委員会・保健委員会・図書委員会・華道部・写真部・奉仕部・ソフトテニス部・剣道部・弓道部・男子バレー部・美術部・ワープロ部・男子バスケット部・水泳部・演劇部・新体操部・茶道部

★学園告知版

増山理事急逝す・中山美代子様から母校へ寄付・第二回体験学習・各科後援会・味の外交官・国際弁論大会に最優秀賞・教生母校の教壇に立つ

附属中コーナー

・この一年間のおもな活躍
・小川君が人権作文で最優秀賞
・校内読書感想文一位作品
・自由作文一位作品
・生徒会にお礼状
・写真で見る楽しい中学校行事

◎平成十一年度生徒会報告

◎就職状況	169
◎職員住所録	175
◎編集後記	184
編集委員長 藤塚 亜弥	

学園の四季



▲想い新たにいま巣立ちゆく (平成11年3月2日)



▲恩師や在校生に送られて
— 名残りは尽きない (平成11年3月2日)



▲入学式に宣誓文を読む新入生代表 (4月9日)



▶ 盛況だった1日体験学習での本校の
概要説明をする校長先生 (8月26日)



▶ 生徒総会であいさつする校長先生、
左端は大島教頭先生

宇都宮短期大学附属中学・高等学校

校歌

作詞 菅谷 徳次郎
作曲 野原 幸夫

ふに たら の たし 一 かね を は る か に つ あ お 一 ぎつ
 まか なわ びら の め み ちさ すお は まち さよ きよ くろ あず れよ とど
 かか たた み に ち 一 かわ い て い そ し し み は は げ む
 おま しな えび の に 一 わわ こ こ げ げ に とめ うで た け れ
 ああ わわ れれ とめ うで とた こ 一 のの まま なな びび や

校歌

一 一 荒の高嶺を 遙かに仰ぎ
 学びの道筋を まさきくあれと
 かたみに誓いて いそしみ励む
 教えの庭こそ げに尊けれ
 あわれ尊 この学びや

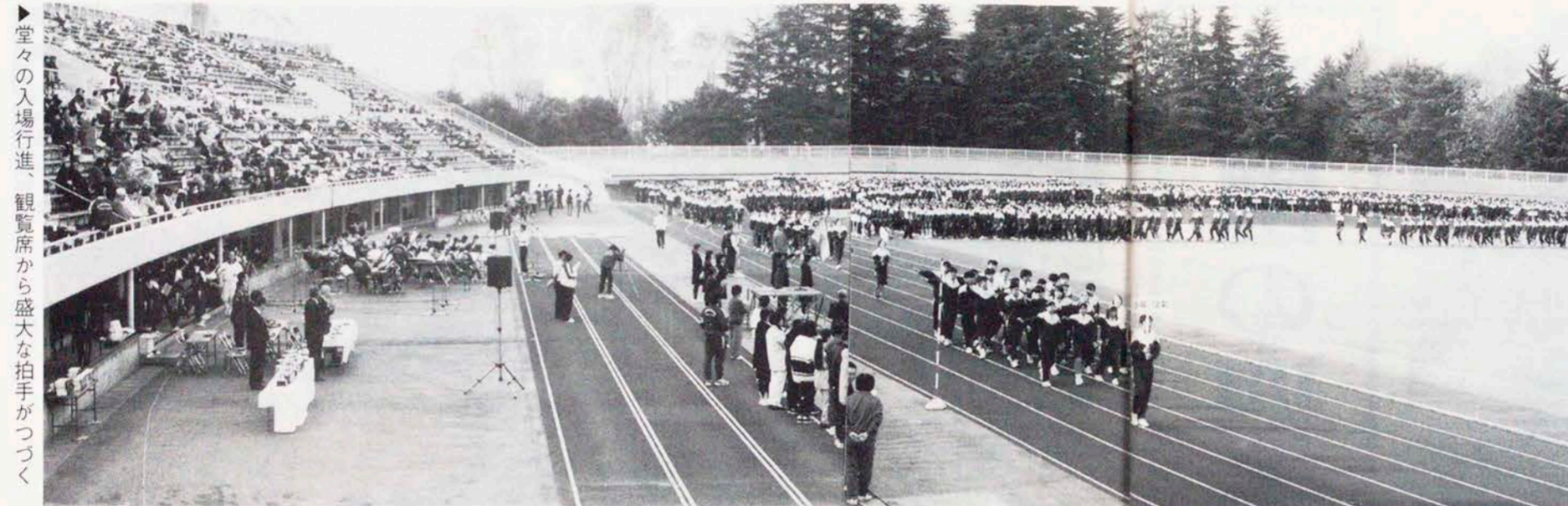
二 庭面に茂れる 姫松小松
 変わらぬ操は 千代万代と
 かたみに祝いて いそしみ励む
 学びの庭こそ げに芽出度けれ
 あわれ芽出度 この学びや

史上最大の祭典

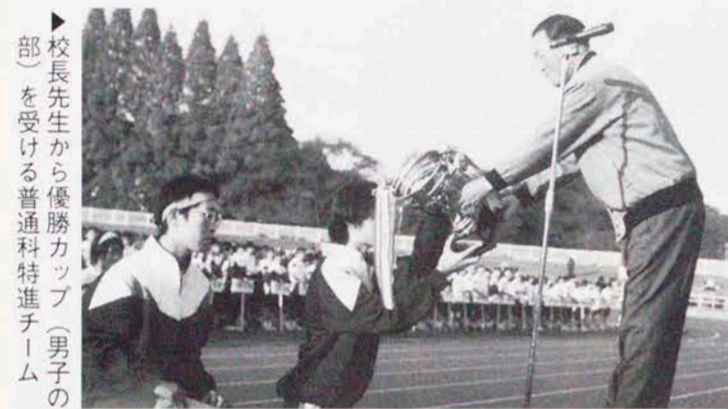
20世紀最後の運動会

平成11年11月7日 県総合運動公園

秋空のもと——3年に1度の中学・高校一体となつての秋季大運動会が、11月7日、県総合運動公園メインスタジアムで行われました。晴天に恵まれ、全校生3300名が参加してくりひろげられた20世紀最後の運動会の演技に、スタンドをうめた多数の来賓、保護者や卒業生などから惜しめない拍手が送られ“史上最大の祭典”となりました。



▶ 堂々の入場行進 観覧席から盛大な拍手がつづく



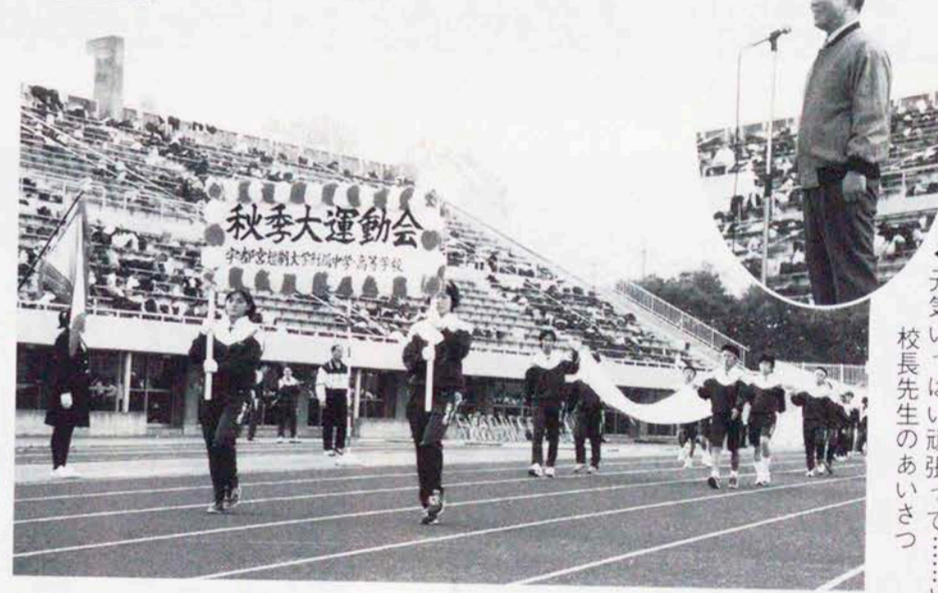
▶ 校長先生から優勝カップ（男子の部）を受ける普通科特進チーム



▶ この日の呼びもののエッサッサ、秋空の下に気合いが入る



▲ 力強く選手宣誓



▲ プラカードを先頭に各クラスがつづく

◀ 元氣いっぱい頑張ってる……と校長先生のあいさつ



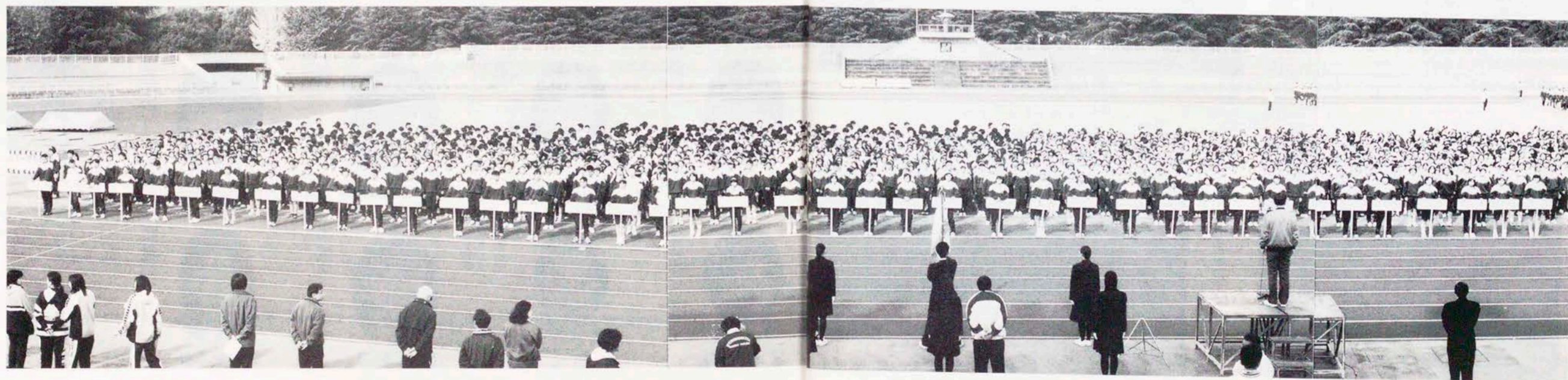
◀ この日、大会を盛り上げてくれたフラスバンド部



▲ 普通科女子生徒全員による美しい集団演技



▲ い、力走また力走



◀ 庄巻、中学・高校の全校生が勢ぞろい

各種の行事

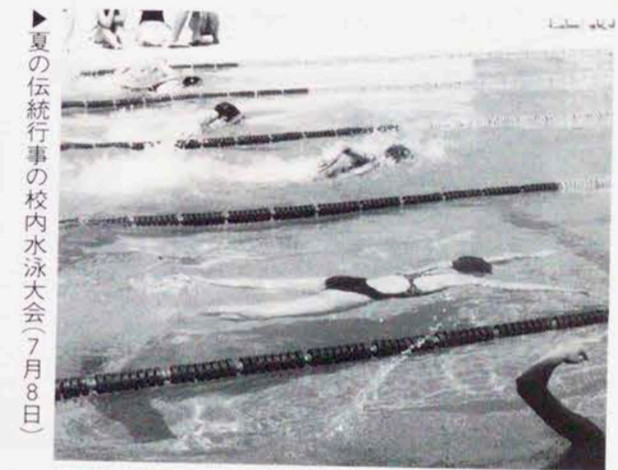


▲自然の中でスピードを楽しむ日光スケート教室
(平成11年2月9日)

▲長い歴史をもつ校内合唱コンクール (9月30日)



▶ナイススマッシュ、とはいかなくても熱戦の校内球技大会



▶夏の伝統行事の校内水泳大会(7月8日)

生徒会役員

 副会長 渡邊 清誉	 副会長 添野 美樹	 会長 熊谷 恵一
 庶務 斎藤 亜佑美	 庶務 佐々木 真美	 会計 花本 絵麻
 会計 砂川 奈津子	 議長団 坂本 絵美	 議長団 村田 光昭
 議長団 関口 智子	 議長団 藤原 早小里	

随想

心優しい人材育てたい
— 献身的な姿に感動、人間そのものを知る —

校長 須賀

あつし 淳



見学させていただく機会を得た。

これらの施設では、最近の新しい傾向として、音楽を生かして心身の機能回復を図る音楽療法
が取り入れられており、その実際の状況も見せていただいた。音楽療法士の女性が、ベッドに横
たわるお年寄りのそばで小さな鉄琴を奏でながら「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ」と優しく歌うと、眠りか

本学園では、優しい心づかいの運動の一環として、
中学生や高校生が福祉施設の慰問を行ったり、生活教
養科の高校生たちが家庭科の授業の一環として、保育
看護、介護福祉の実習に県内の保育園や養護老人ホ
ムなどにお世話になっている。また短大の学生は、教
員免許取得の必修科目として、養護学校や福祉施設で
介護の体験学習をさせていただいている。私もごあい
さつを兼ねて、本年も数か所の養護老人ホームなどを



図書館・学生ホール（建築中）

宇都宮短期大学音楽科校舎

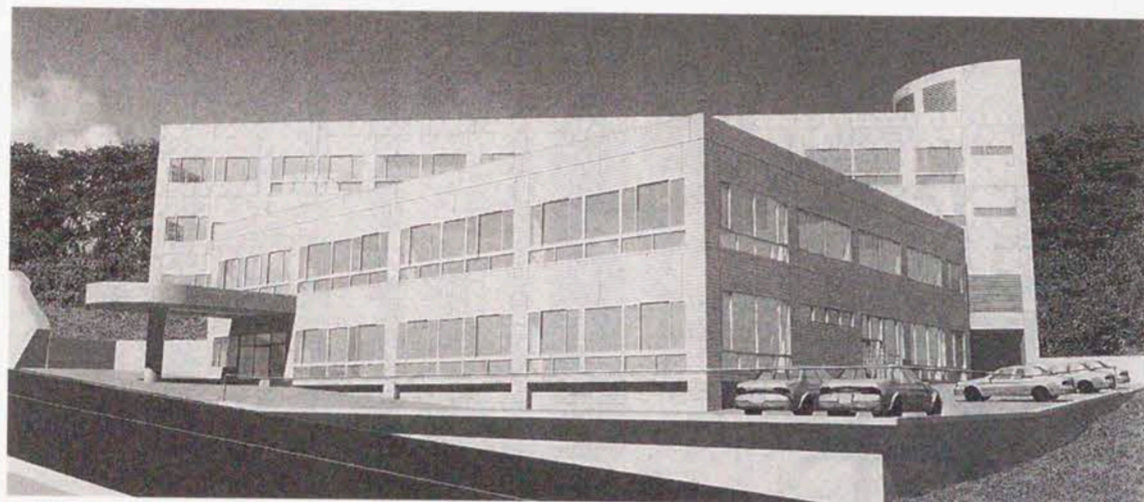
ら覚めてかすかな声で唱和する。ゆっくりゆっくり、遠い昔の夏の日、「蛍が飛んでいますねえ」「花が美しく咲いていますねえ」と語りかけるのに合わせて次第に歌声がはつきりと聞こえてくる。

音楽療法士の彼女がボランティアとして毎週訪問するのを楽しみにしているという。音楽を通して語り合う。かすかな記憶のはずが、そのひとときには無限の広がりを感じさせるのであろうか。わずか一人三十分間であるが、終わったときはほほ笑みながらありがとうと手を握って放さない。

続いて彼女はロビーに出る。その一角で「青葉茂れる桜井の…」と、彼女の巧みな指揮で、お年寄りのグループがなつかしい唱歌を歌う。ピアノの伴奏が何度も何度も繰り返される。大声で力いっぱい歌う人、恥ずかしそうにする人、黙って聴く人、初めのうちはバラバラだったが、タンバリンやカスターネットなど思い思いの小楽器を鳴らしているうちに一つにまとまってくる。

私は養護老人ホームなどを見学して、介護福祉施設で働く方々が、献身的にお年寄りのお世話をしている姿に感動し、涙がこぼれるのをどうすることもできなかつた。

今日、高齢社会にいかに対応していくかが大きな問題となっている。介護保険制度がいよいよ本年四月からスタートすることや医療保険、年金制度の在り



宇都宮短期大学人間福祉学科校舎（完成予想図）

方をどうするか、長年の課題が一気に問いかけられている。栃木県においては「高齢対策推進計画」を策定し、「充実した高齢期と活力ある社会をつくる」「自立のための支援システムを確立する」などを目標に、さまざまな具体策をまとめている。どれも適切かつ必要な計画である。

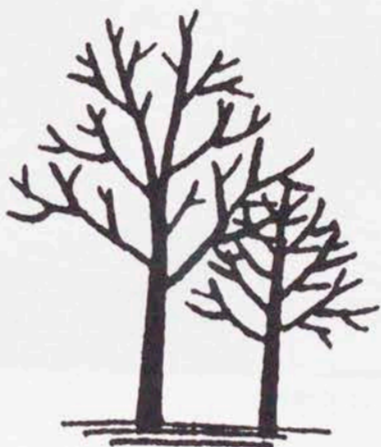
同時に、私は介護福祉施設で働く人々のすばらしい活動でできるだけ多くの人々が知り、一人でも多くこのような施設で活躍できる人材を育成することの必要性を痛感する。

しかし、単に福祉の知識や介護の技術の習得に追われるのではなく、原点に立って、まず人間そのものをしっかり知る必要がある。お年寄りや障害者一人ひとりにはそれぞれ生活してきた歴史があり、生きてきたという誇りがある。介護を受ける人もする人も、一人ひとりの人間であるという点をしっかりと自覚するところから出発したい。

そのためには、まず、お年寄りは人生の先輩であり、私たちが暮らす社会や文化、経済基盤、地域をつくり構成してきた方々であることを知り、尊敬の気持ちで接してゆきたい。高齢者や

障害者を全人格存在としてとらえてこそ真に心豊かな高齢生活を過ごせるのではないだろうか。高齢社会の急激な進展のなかで、この分野における人材育成の重要性は言うまでもないが、とりわけ人間性豊かで倫理観をしっかりと身につけ、一人ひとりに優しい心を持った人材が何よりも求められているのではないかと思う。私はわが宇都宮短期大学や附属高校においてこのような人材を育て、時代の要請にこたえたいと念願している。

宇都宮短期大学は、昭和四十二年創立以来、本学園の教育理念である「全人教育」によって音楽短大として国際的にも活躍する人材を育ててきた。須賀学園百年の歴史と伝統に育まれ、「一人は一校を代表する」を生活目標に発展してきた宇都宮短期大学が、これを社会福祉の分野において実践するために、人間福祉学科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）を設置することとなり、平成十三年四月開設を目指して着々とその準備が進んでいる。



（本稿は、筆者が下野新聞客員論説委員として、論説欄「針路」に寄稿したものに補筆したものである。）

略歴

東京大学を卒業、文部省に勤務。文部大臣秘書官、初等中等教育局教科書課長、同初等教育課長等を歴任。一九六八年須賀学園に戻る。現在、須賀学園理事長、那須大学長、宇都宮短期大学長、同附属中等高等学校長、日本私立短期大学協会常任理事、栃木県私立中学高等学校連合会長、栃木交響楽団会長等

下野新聞「とちぎ20世紀」 女子教育の先駆者 須賀栄子

とちぎ 20世紀

創立者須賀栄子先生の特別記事が平成十一年七月二十五日付けの下野新聞掲載ページの全ページにわたって掲載されていますので御覧ください。（編集部）

須賀栄子

封建時代の名残から「女子には教育は不要」と考えられていた一九〇〇（明治三十三年）二十七歳の若さで私学としては県内初の女子学校を建学した女性がいた。宇都宮短期大附属高校をはじめとする須賀学園の創立者、須賀栄子（すか えいこ）。「立派な母親をつくる」ことが健全な国家の基礎となる」という信念のもと、良妻賢母の育成に一生をささげ、県内女子教育界の草分けとたたえられる。だが、栄子が家庭を持つことはなかった。

良妻賢母の育成に生涯

「立派な母親になって、いい家庭をつくりなさい」

一九三四年（昭和九）年春、卒業式を間近に控えた宇都宮市河原町（現松が峰二丁目）の宇都宮女子高等職業学校（当時）の二年間の花嫁修業を終えようとする生徒たちの教室に、張り詰めた緊張感が漂う。教壇には、校長の須賀栄子がいた。

「あれは作法の授業だったのか……。校長先生が卒業後の心構えを説いたのね」。卒業訓話ともいえる授業を受けた大岡テイさん（八一）。「同市中央三丁目。その訓話を思い出し始めると、大岡さんの居住まいが自然と正された。当時は男尊女卑の時代。「女子は結婚して家庭に入る」という意識が根強かった。それでも昭和に入ると、職業

婦人が増え、大岡さんの学年でも就職する同級生が数人いた。そんな社会の流れを懸念したのでろうか。栄子の熱のこもった訓話は約一時間にも及んだ。

「これから世の中はどんどん変わり、職業に就く人もいるでしょう。しかし、自分の職業よりも母親であることを大切にしなければ。このことを決して忘れないように」

訓話で強調されたのは、良妻賢母の必要性、母性や家庭の大切さ。栄子の教育理念が明快に表れていた。

須賀学園の前身、共和裁縫教習所が設立されたのは一九〇〇（明治三十三年）。ちょうど一世紀前のことだった。

三〇（昭和五）年の学校要覧に、次のような記述が残る。

「優秀なる女子国民の養成は結局良妻賢母の外に出でざるものと信じ、本校訓育の第一義とせり」

「祖母の考えは徹底していた。裁縫という技能の習得を通し、女としてのしつけ、家を守ることを学ばせたんです。栄子の孫で須賀学園理事長を務める淳さん（七四）は、創立者の教育方針を

こう説明した。
「女徳の向上」を目指すため、裁縫を
中心に、修身、家政、算術、歴史、理
科、英語などが必須科目として並んだ。
栄子自らが教えたのは作法と修身。こ
の二科目は栄子の理念を生徒にじかに
伝える場でもあった。

「作法と修身」理念貫く

「駄目。やり直し」
作法を学ぶ教室では、しばしば栄子
の凛（りん）とした声が飛んだ。
「畳のへりを踏んだだけで怒られる。
自分の順番なのに、緊張してひざが震
えて立てないときもあった。二六（大
正十五）年に入学した保田絹子さん（八
七）＝同市一条三丁目＝には、だれよ
りも厳しかった栄子の授業が印象深い。
お茶出し、障子の開け閉め、座り方、
はしの持ち方、床の間の花の飾り方、
和室の専用教室で、日常生活の基本マ
ナーが徹底的にたたき込まれる。誤っ
た仕方をすれば、即座に注意された。
作法が実践なら、修身は精神論だっ
た。

「女の本分を尽くしなさい。良き妻、
良き母として、賢い子供を育てなさい」
「お国のために親孝行し、嫁ぎ先の姑
（しゅうと）にも実の親のように接し、
主人を大事に。子供には愛情を持ちな
がらも厳しく育てなさい」
「人のことをうらやまず、さげすまず、
疑わず。おおらかな気持ちを持ちなさ
い」
保田さんは卒業から七十年たった今
でも、栄子の教訓を簡単にそらんじら
れる。「先生は独身だったけど、それは
もう懇々と家庭の大切さを教えてくだ
さったから」

27歳で県内初の私立女学校創立

栄子は、生涯一度も結婚せず、子
供を産み育てたことはなかった。
学校を設立したときは二十七歳。当
時の女性なら十代で結婚するのが主流
だった中、栄子はとうに婚期を過ぎて
いた。「最初から教育一筋。家庭がな
くて寂しい」なんて考えは超越してい
たはず」と淳さん。
校長として、経営にも携わった。し

かし、全国的にも珍しい女性校長。加
えて、「官尊民卑」の風潮。この「二
重の壁」は厚く、経営は決して順風で
はなかった。
好景気に沸いた日露戦争後、銀行で
はなく大商人からの起債で校舎増築を
重ねた。ところが間もなく、世界恐慌、
大凶作のおおりで、生徒数は激減、三
〇年ごろには借金返済に収入減が加わ
り、経営難に陥る。職員給与支払いに
困った栄子が、満期になった自らの生
命保険を充てたほどだった。
当時の学校理事は地元の大商人が中
心。理事会が開かれると、風格漂う、
羽織はかま姿の大旦那（だんな）たち
が連なっていた。女性は栄子ただ一人。起
債を要請しながらも、明治男と対等に
接した。
「資金集めは大変苦労したらしい。女
子教育にかける熱意を信用してくれた
のか、大商人が後援してくれた。今の
わたしにはできませんね」
初代校長としての栄子に敬意を表す
一方、淳さんは優しくした祖母の思い
出を次々と披露してくれた。
遊びに行けば毎晩のように泊めてく

れたこと、当時としてはハイカラな自
転車を買ってもらったこと、校舎を駆
けずり回ってもしかられなかったこと
…。「皆さん厳しい人だったというが、
孫の私には甘かった」
夏休みには、栄子は必ず淳さんだけ
を伴って避暑に出掛けた。茨城県の河
原子海岸で、のんびりと過ごした二週
間。波打ち際で遊ぶ淳さんを、栄子は
砂浜で温かく見守っていたという。そ
こに、学校経営を一身に背負った女性
校長の姿はなかった。
「家庭生活のなかつた祖母は、孫と遊
ぶのがせめてもの息抜きだったのか
な」。淳さんとの触れ合いの中で日々
苦勞がいやされていたのだろうか。
栄子が亡くなってから六十五年。
女性結婚しても仕事を辞めず、共
稼ぎ夫婦が増えた。そして晩婚化と少
子化が同時進行している。「男は仕事」
「女は家庭」といった伝統的な性によ
る役割分担意識は変容し、女性の生き
方の選択肢は拡大。良妻賢母が理想像
だった時代は過去に追いやられつつあ
る。

「今は女子教育はないでしょう。女も

男も一緒。人間教育の時代です。淳さ
んの妻で宇都宮短大附属高副校長の万
里子さん（七二）は強調する。
須賀学園も共学校に衣替え。時代の
すう勢から、教育理念も良妻賢母育成
から全人教育に変わった。私学ならで
はの特色を出し、「次代の人間形成」と
いう栄子の精神は形を変えながらも
脈々と受け継がれている。
男女を問わず、自由な時代になった。
「ただ、秩序や規律といったモラルが
薄れている。押しつけるわけではない
けれど、服装や言葉遣いとか…。万里
子さんは問題提起を続ける。「権利と機
会に恵まれた幸せな時代。もっと自分
の人生を生かすやり方もあるのでは。
人生を大切に。これは栄子の教えにつ
ながっている」
栄子は現代の女性の生きざまをどう
見るだろうか。「素晴らしい」と拍手を
送るのか。「嘆かわしい」とため息をつ
くのか。案外「まだまだ」と叱咤（しっ
た）激励するのかもしれない。

文・石崎 倫子

× 壬

○：須賀栄子は群馬県の館林藩の武士
の六女として誕生。両親を早くに亡
くしたため、宮中の女官だった長姉
から厳しく育てられた。尋常中女子
部（現宇都宮高）を卒業後、東京の
大成学館で英語、理科、裁縫などを
修めた。三十四年間にわたる女子教
育への尽力が認められ、亡くなる直
後には昭和天皇への単独拝謁（はい
えつ）が予定されていた。
○：共和裁縫教習所は、県高等女学校
（現宇都宮女子高）に続く県内二番
目の女学校。豪農や商人の娘が多く
県内をはじめ茨城、福島などからの
入学もあった。従来の各種着物の裁
ち方を大幅に改良した「須賀流」の
考案、県下初のバザー開催なども
知られる。
○：栄子の没後、おいの友正が学校を
引き継いだ（淳さんは友正の長男）。
六七年には宇都宮短期大を新設、高
校も六八年、現在の校名に改称した。
今年四月には那須大学を開学。来年、
須賀学園は創立百周年を迎える。



新旧生徒会長のあいさつ

平成11年7月25日付け下野新聞第9面

1999年7月25日 下野新聞 THE SHIMOTSUKI

女子教育の先駆者 須賀 栄子 (1873-1934)

どちぎ 20世紀 27

良妻賢母の育成に生涯

「作法と修身」理念貫く

27歳で県内初の私立女学校創立

20世紀ファイル 1927年(昭和2年)

須賀栄子

9面

須賀栄子

どちぎ

9面

新体操をやるには団体に出場するところが目標である私達は五人ぎりぎりのメンバーで団体に挑戦したので。初めてという異例の事態、出場したいという気持ちから約二週間の短い練習期間で臨むというのは、冒険としかいいようがありません。手具はリボンとフープの組合せで、問題はリボンを全員持った事がなかったので全員が一人のスタートとなりました。サブアリーナは天井が低く、十分な練習もできずあせるばかりでした。でも「やりたい」という気持ちは皆同じでした。団体は五人の息や気持ちは一つになって始めて練習することができ、その難しさに何度も弱音をほきそうになりました。皆がいてくれたおかげで最後まで頑張りぬくことができました。試合は、特に大きなミスもなく、見事五人の気持が一つになり、演技をするのができました。点数はもちろん大切ですが、その時の私達には点数よりも「やった」という満足感でいっぱいでした。三年間新体操をやって本当によかったと思っています。

が、顧問の先生をはじめ、いつもお世話になっておられる小川澄恵先生のもと、毎日元気に楽しく練習に励んでいます。少しでも興味のある人はぜひ見学しに来て下さい。

(部長 西田絵美)

茶道部

―結構なお手前でございます―
日本が世界にはこれだけの伝統芸能である「茶道」の稽古を、私達六十四名(男子五名女子五十九名)は顧問である伏木先生と黒崎先生のご指導のもと、大日本茶道学会の五月女先生・花咲先生をお招きして、隔週水曜日の午後三時三十分から四時三十分の間、新二号館4Fの家庭科特別教室にあるお茶室で行っています。

毎年行われる「学校祭」では日頃の稽古の成果を発揮するために、特別のお茶席(「睦庵」)を頂いております。また特に今年は、秋に行われた大運動会の部活対抗リレー(文化部)で、男子が見事第一位を獲得することができました。

ここで日頃茶道部に入りたいが、どうしても決心がつかない!という男性諸君そして女性の皆様にとっても嬉しいお知らせです。開部以来ずっと女性が部長を務めていた茶道部ですが、何と来年、初めての美少年男性部長が誕生します!(「ライバシー」の都合上、名前をお教えできないのがまことに残念です。)さあこれを土台に男性諸君茶道部にドンドン入部しようぜい!(注:別に強制ではありません。もちろん女性のみなさまも。)

「お茶」の世界とは、触れる事はないものかもしれませんが、少しでも興味・関心がある方がおられましたら、ぜひ一度お茶室に足を運んでみてください。また、全く知識が無い方でも安心して活動する事ができます。もしかしら新しいもう一人の自分を発見できるかもしれませんよ。

(茶道部 田中博継)

学園告知板

本校理事の増山前宇都宮市長急逝す



本校との姉妹校であるハウィックカレッジからの初の訪問団と会う増山市長(当時)左端
平成三年五月十三日

長い間、本校の理事としてご尽力いただいた宇都宮市の増山道保前市長が昨年九月十四日に脳出血のため急逝されました。

増山前市長は昭和五十四年の市長選に初当選して以来、五期二十年間市民と共に県都宇都宮の発展に尽力されました。昨年四月に後進に道をゆずって引退したばかりでした。七十四歳でした。

増山前市長はまた本校の理事として本校の運営発展にも貢献され、お孫さんたちも本校を卒業しています。心からご冥福をお祈りいたします。

中山美代子様から 母校へ感謝を込めて寄附金

教諭 柳 清和

本校音楽科の第一期卒業生(昭和四十一年度卒業)で、長く中学校の音楽の先生として活躍されていた中山美代子(旧姓・梅田)様からこのほど本校に多額の御寄附をいただきました。このためお宅にお伺いして当時のお話をお聞きました。

現在、大田原市福原にお住まいの中山様は、大田原中学校の御出身。当時音楽を勉強する生徒がほとんどなく、中学校のピアノの台数も限られていた頃ですが、小学校の担任の先生が音楽好きなどからその影響を受け、ピアノの途を志した中山様は、本校(昭和三十九年当時の校名は、宇都宮須賀高等学校)音楽科(学科新設の第一期生)への進学を第一希望とされました。しかし、私立高校への進学者が稀有の時代で、中学校の担任先生から大田原女子高校を強制受験させられた上での

本高入學だったそうです。(大女も合格、
辞退)

新設の音楽科は、本校最初の男女共
学の学科(1クラス四十名、うち男子



自宅での中山美代子様(平成十一年八月 柳写す)

は六名)で、栃木県内では初めて(全
国的にも珍しい)ブレザースタイルの
新制服着用ということもあり、高校生
の羨望の的だったとか。良い意味で

のエリート意識を抱
くことができ、厳し
いピアノのレッスン
にも耐えられたのだ
そうです。特に、今
でも印象深いのが、
田淵進先生(現在・
宇都宮短期大学副学
長)のお説教の数々
と旧講堂(現在の須
賀栄子記念講堂の場
所)でのレッスンで、
この高校時代の三年
間にわたり、中山様
は須賀栄子育英奨学
生として月額四千円
(昭和三十九年当
時)の奨学金を給与
されていたことが、
今回の御寄附を思い
立たれた直接の動機
だそうです。

そして、昭和四十二年三月に音楽科
を卒業されるとすぐ、同年四月に開学
したばかりの宇都宮短期大学音楽科の
第一期生として御入学、さらに同短大
研究科へと進学され、四年間にわたる
研鑽を積まれました。特に思い出深い
のは、ピアノの中島和彦先生や櫻井秀
先生から素晴らしいレッスンを受ける
ことができたこと、また、級友らと東
武デパートの地下の喫茶店で音楽談義
に華を咲かせたことなどだそうです。中
山様にとってこの上なく充実した楽し
い学生生活だったようです。

短大御卒業後は、栃木県の中学校教
員採用試験に合格され、黒磯小を最初
に、黒羽中、金田南中、佐久山中等、
二十一年間に及ぶ音楽の教員生活をされ、
八年前に退職されて、現在は御家庭に
ありながら、近くの子どもたちにピ
アノのレッスンをされたり、月二回ほど
大田原市シルバークラスの伴奏をさ
れたりとお活躍。さらに、宇短大第一
期卒業生による女声コーラスグループ
を結成しようと、声楽の船山洋子さん
(お子様が現在宇短大附属高校音楽科
に御在学)を中心に、目下準備にお忙

しい最中とか。そのコーラスを一日
も早く私たちにお聞かせ下さいと思
います。

最後に、本校の卒業生として最も嬉
しく誇りに思えることは、那須大学の学
科増設(平成十一年四月)や宇短大の学
科増設(人間福祉学科、平成十三年四
月・開設)など、母校が目ざましい発
展を続けていることであり、また日本
のみならず国際的にも活躍している音
楽科卒業生の方々の存在であると強調
されてきました。返還義務のない須賀
栄子奨学金で私を育てて下さった学校
への御恩、自分自身の大きな目標で
あった音楽教師として二十年間勤続で
きた心の支えへの感謝の気持ち、そし
て私に期待し最大の熱意をもって接し
てくださった先生方に対して、ささや
かながら御恩返しをさせていただいた
と中山様は繰り返し感謝をされました。
須賀校長先生は、いただいた寄附金
は、創立百周年記念事業に使わせてい
ただきたいと感謝しておられます。
中山美代子様、ありがとうございます。

第二回体験学習に三、〇〇〇人

一般の中学生を対象として昨年から
始まった第二回目の一日体験学習は昨
年八月二十六日と二十七日の二日間に
わたって行われました。第一回目の参
加者は千五百名でしたが、今回は三千
名を越しましたので二日に分かれて行
われたものです。

当日はまず、記念講堂大ホールで校
長先生から本校の教育方針や施設など
の概要をお聞きした中学生たちは、普
通科、生活教養科、情報商業科、調理
科、音楽科の各科の紹介や研究発表、
実技公開などを見学したのち、それぞ
れの志望コース毎にわかれて授業の体
験学習をしたり、授業や実習を見て回
りました。

最後には本校からの心づくしの
ジュースのどをうるおしながら、
口々に「すばらしい」「内容、施設とも
に立派なのに驚いた」などと中学生も
付き添いの保護者や先生方も感想をも
らしていました。

各科後援会総会開く

普通、生活教養、情報商業、調理、
音楽各科の今年度総会が五月二十九日
に、記念講堂、総合体育館などを会場
にして開かれました。生徒の体験発表
や生徒作品の展示、発表、実技披露な
ど、各科それぞれに趣向をこらして保
護者の皆さんに見ていただき、大へん
好評でした。
当日の出席率は全校で千四百八名、
四十七%です。

調理科OBが味の外交官

二人そろってヨーロッパへ

味の外交官として調理科の卒業
生、有井 規さん(平成五年)と小林
孝博さん(平成六年)の二人が昨年の
春に、ヨーロッパの日本大使館公邸料
理人に選ばれ、有井さんはベルギーの
ブリュッセルへ、また小林さんはスイ
スのジュネーブに赴任しました。

公邸料理人は大使夫妻と使用人の毎日の食事を作るほか、賓客を招くパーティーの料理を取り仕切る大事な仕事です。出発に先立ち本校を訪れた小林さんは須賀校長先生から激励のことばをいただき「海外で自分の力を試すよい機会なので精一杯がんばります」と話していました。

本校生の活躍

国際理解の弁論全国大会へ

このほど県立博物館で行われた県高校国際教育研究協議会主催の第三十六回県高校国際理解弁論大会で二年二組の斉藤美幸さんが見事最優秀賞を受けました。

斉藤さんは、今年八月静岡県で行われる全国大会に出場します。

◇ヤング・ライスクッキング・コンテスト(十月宇都宮)

最優秀賞(知事賞)

三年二十五組、三ッ木広明君 三ッ木君は全国大会に出場し佳作に入選

◇きのこ山菜料理コンクール(十月宇都宮) 最優秀賞(知事賞)
調理科三年二十四組 下地加奈子さん、下地さんはことし三月の東京で行われる全国大会に出場。
◇高校生駅弁チャンピオン全国大会(十一月東京) 準優勝
調理科三年二十四組 下地加奈子さん、生活教養科三年十八組 水澤恵子さん チーム

教育実習生、母校の教壇に

平成十一年度の教育実習生として、本校の卒業生多数を迎えて二週間におたる実習が行われました。次はその実習生の感想の一部です。

国語科

二週間の教育実習を終えて
福岡教育大学 教育学部

竹田 壮一郎

私の教育実習は、「読書好きの堅い先生」で始まった。初日の自己紹介のことで。私は自らを「読書が趣味です」と紹介したのだ。

そのようにして始まった実習期間の前半は、参観授業が主であった。各教室とH・Rとの間を東奔西走する日々が続いた。諸先生方の授業はどれも非常に参考になった。時間配分や、板書の工夫の仕方や、発問の方法など、現場の先生方の授業内容には、改めてなるほどと感じさせられる事ばかりであった。授業を参観しているうちに、「果たし

て自分にもこのような授業を展開することが出来るだろうか」と不安ばかりが募っていった。「千里の実習も指導案から」とばかりに、期間のはじめから指導案作成に取り組んでいた。やっとのことで作り上げた拙い指導案の原案を、教科指導の柳清和先生に提出し、添削を受けた指導案を修正して再提出する……というやり取りの中、指導案作成の要点も何となくつかむことができた。

そして迎えた初授業。事前に用意した指導案や短冊のお陰で、緊張や不安は幾分取り払われてはいたが、実際に教壇の上に立つのは初めてである。うまくしゃべることが出来るか、という一抹の不安があった。授業が始まった。とにかくしゃべる。短冊を次々に掲示する。徐々に授業が流れ始めた。発問で何故か生徒が笑っている。何とかうまくいったようだ。ひとまず「やっていけそうだ」という漠然とした自信の萌芽のようなものを得た。

H・Rでは、掃除の時間が主な活動時間だった。「ちゃんと掃除やらないかんだよ」とすっかり染み付いた博多弁で



母校に帰ってきた教育実習生(昨年6月18日)

編集後記

二〇〇〇年という記念すべき節目の年に、「ひめまつ」第五十四号を皆様にお届けできる事を、私達編集委員一同心より嬉しく思っております。

まず、恒例の校長先生の巻頭随想では、本学園の創立百周年についてご執筆いただきました。長い歴史をもつ私達の学園も、新しい時代の到来と共に、今後なお一層充実発展し、目覚ましい躍進を続けていくことでしょう。

そして「声」の欄では今や全地球的課題となっている環境問題について、特にゴミというテーマにしばって皆様に意見を述べて頂きました。また「招待席」では、三人の先生方からそれぞれの専門分野における貴重な玉橋を賜わり、心より感謝申し上げます。第です。その他にも読書感想文や意見文、詩、短歌、俳句や日R紹介等すばらしい作品が多く、皆様からお寄せいただいた写真やイラストも大いに誌面を飾ってくださいました。

私たちが携ったこの「ひめまつ」は、戦後間もない一九四七年(昭和二十二年)三月に創刊されました。その歴史を踏まえ、さらに百年、二百年の礎になるかと思うと、多くの皆様には非隔から隔まで読んで頂きたいという思いがより強く湧いてまいります。

最後にになりましたが、編集委員会顧問の和久誠先生、柳清和先生、木村圭子先生、石川智規先生をはじめ、本書を発行するにあたり尽力して下さった全ての方々に、心から感謝申し上げます。

(編集委員長 藤塚亜弥)

校史と校章

ことし平成12年はミレニアム(新1000世紀)、20世紀最後の年であり、また本校は11月3日に創立100周年の記念日を迎えます。すでに最大の記念事業として一昨年には那須大学が開学し、また来年は短大に人間福祉学科が増設される予定です。

思えば、本校は明治33年に須賀栄子先生によって創立されました。須賀栄子先生は、女子に最も適切な技芸を教授し、その時代と境遇とに順応すべき実践的婦人の養成を教育の趣旨とし、共和裁縫教習所から、共和裁縫女学校、宇都宮須賀女学校、宇都宮女子高等職業学校と校名を改め、発展させてゆかれました。その後を須賀友正先生が受け継がれ、学制改革により、宇都宮須賀高等学校となり、さらに、宇都宮短期大学を設置し、高校も宇都宮短期大学附属高校と改名されました。友正先生の後を受け継がれたのが、現校長先生でいらっしゃる須賀 淳先生です。先生は宇都宮短期大学附属中学校を設置し、ますます学校を発展させて、現在に至っております。

我が校の生活目標である「一人は一校を代表する」という言葉の意味は、生徒一人一人が、それぞれに、本校生徒としての価値を知り、その価値を自覚することこそ、人間の大きな喜びにつながり、幸福への第一歩であるというものです。学校はそのあり方を勉強する場であるというのが、須賀栄子先生のお考えでした。私たちは現在、この言葉を胸に、本校生徒としての価値を認識し、生活しています。

本校には、現在に至るまで、いくつかの校章がありました。現在使われている校章の由来は、創立者須賀家の祖先が武士の旗印として使っていた、「ス」の文字を3つ組み合わせたものです。

「ひめまつ」第五十四号(非売品)

平成12年三月一日印刷発行

宇都宮市陸町一番三十五号

宇都宮短期大学附属高等学校

編集人 顧問 柳 清和

発行人 生徒会長 熊谷 憲一

印刷所 宇都宮市鶴田町一三五九の一

ヤマゼン印刷株式会社

印刷人 山本 征一郎

発行所 宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

〒320 8585

TEL 028(634)4161・3番